

資料翻刻

## 牧口常三郎「ヴェスヴィアス山の噴火」

ここに紹介するのは、牧口常三郎が編輯兼発行者となっている『通俗学術雑誌 先世』第1巻第7号 1906(明治39)年5月3日発行に掲載された牧口の講話である。『先世』についての詳細は、本号『通俗学術雑誌 先世』総索引(197-205頁)を参照のこと。なお、原本はたて書きであるがそれを横書に直した。ルビ等は全て原文のままである。翻刻は北川洋子、田中聖子が担当した。

先世(講話)

ヴェスヴィアス山の噴火

牧口常三郎

### ○ ヨーロッパの火山

ヨーロッパは火山の極めて少ない大陸で、デンマルクの属領で大西洋中にある、彼の有名な火山島アイスランドを除けば、ヨーロッパ中に活火山のあるのはイタリア一國である。其御蔭でイタリアは硫黄の産地として、其輸出額一年間四千七百万リラ(一リラは我四十錢弱)に達して居る。(我日本の硫黄産額は三千万斤餘である)。其代りに時々今度の様に噴火の災を蒙らなければならぬ。而してヨーロッパの活火山は、アイスランドに七ヶ所あつて、イタリアの本土に今度破裂したヴェスヴィアスと、シシリー島にエトナ山との二個があるのである。共に地中海に臨み風景の絶佳なるが爲めに有名で、ヨーロッパの文人雅客を始めとして、世界の旅行家が必らず登山をするのである。本號の口繪は即ち中央イタリアの大都會ナポリより、遙にヴェスヴィアスの噴煙を遠望する圖である。

### ○ ナポリ灣の風光

ヴェスヴィアス山はイタリアではモンテ・ソマと呼び、ナポリ灣の中部に隆起せる火山で、其高さは實に千三百〇メートルである。ナポリの市は其眞西六哩餘りナポリ灣の北岸にあるので、此邊一面の風景頗る美しく、イタリアにて諺にも「ナポリを見てから死ぬ」と云ふ語のある位である。ナポリ市の後にはカボデモンテと云へる丘陵ありて、貴籙の別荘や森は遙に深緑の海水に映じ、沖の方には其貌も様々な小島が散在して居るし、其海岸は遠くヴェスヴィアスの山麓に連なつて居る。或る旅行家の言に「世に類なき美しき自然の下に、斯る穏和な氣候と優美な風景とを有して居る市は餘所にはない。此所は地の上に落ちた天國の一片ではあるまいか」と云はれて居る。斯る美しき風景も悲惨で語るも憐れな悲劇が、時には演ぜられるので、既に四月五日ロンドン發のロイテル電報は、ヴェスヴィアス山が激烈な破裂をして新に噴火口を生じたと報じて來た。而して其翌日のベルリン電報は、激烈な噴火中で多數の村落は、鎔石の爲めに危険であると報告して居る。今が今まで世界に比類なき美國と歌はれ、地下に天國が落ちたのではあるまいかと嘆美された、此のナポリ灣頭は今阿鼻叫喚の焦熱地獄と化し去つたのである。

○ 紀元後七十九年の大噴火

今より千八百百年前には、イタリアはローマ帝政の初期で繁昌を極めて居つたので、當時このナポリ灣頭のヴェスヴィアス山は、煙を吹くでもなく火を飛ばすでもなく、恐ろしき火山であるとは誰も夢にも思ふものはなかつた。斯くて此の山の附近の風景美しく氣候温和な地方は、繁昌な市や都會が所々に散在して居つて、ヴェスヴィアス山の傾斜には香はしき橄欖樹や葡萄の下に、牧童は無心に跳びまわる羊を牧して居つたのであつた。然るに豈圖らんや此の優しき扇子を倒にした様の山は、世にも恐ろしき噴火山であつたのである。其初めて噴火したのは西曆紀元後七十九年、ローマ皇帝チツスの御世の第一年八月のことであつた。此山の噴火と共に恐ろしい地震が起つて、附近カムパニアの市邑は多分破壊され、特にポムペイ及びヘルキュラニウムと云ふ繁榮な大都會は、地震の爲に壊された上尚ほ熱灰と鎔石とに埋められて仕舞つたのである。當時噴火口より噴出した灰は、遠くエジプト、シリアまでも達したとのことで、當時の恐ろしさも推量されるのである。此時の噴火の有名で今日までも世界の火山破裂の標本の様に持て囃されるのは、高名の大學者プリニウスの學問に熱心であつて、此の火山破裂研究の爲めに其生命を失つた物語がある爲めなると、此プリニウスの養子で且つ甥である少プリニウスが、當時の状況を今日に傳へた爲めなのである。

○ 老プリニウスの傳

老プリニウスはイタリアの北部ヴェローナの出生で門閥家の子であつた。軍人として殊功を立てローマの神官となり、イスパニアの知事となつた。斯く官途にあつて吏務に従事して居る間にも、夜中は必らず文學理學の研究を怠らなかつた。而して其勉強は非常で一分一刻も時を惜んで、ローマの首府へ行くときにも必らず馬車に乗つて行いて、書記を同乗させて或時は此に書籍を讀まして、或時は研究の結果を口授して筆記せしめたとのことであるが、此が馬車内で外出の途中であると云ふのでも、其勉強の唯ならぬことが分るのである。彼は後ヴェスパシアヌス及びチツス皇帝の恩遇を蒙り大に重用された。而してヴェスヴィアス破裂の際にはローマ艦隊の一司令官として、ナポリ灣頭ミセヌムに居つたのであるが、其時の破裂の模様を研究せんとしてスタベア市に赴き、年五十六歳で硫黄氣の爲めに窒息して命を終つたのである。此人の著述は今日三十七卷の博物志が存して居るのみであるが、書中論ずる所は天文氣象鉱物植物動物に關する事項より、地理及び學術技藝商業交通の歴史に至るまで、實に該博で且つ有益の著術である。此外諸家の書籍を閱讀する際書きつけ置きたる、漫録類百六十卷を著はしたとのことであるが今日に傳らない。當時ルチニウスなる人老プリニウスの博學なることを傳聞して、氏の漫録を三万二千有餘圓の大金を以て購はんことを申込んだが、プリニウスは家富み何不足なき身のこととて之を辭し、其養子少プリニウスに傳へたとのことである。

○ 老プリニウスの死

西曆紀元後七十九年八月二十四日、プリニウスはミセヌムの別荘に心を學問の研究に潜めて居つたが、午後一時頃人ありて、ヴェスヴィアスの山上に、其形に於ても大さに於ても異常の雲顯はれ、其状恰も上に綠葉を廣げたる樹木の如しと告げて來た。何時も學術の研究に熱心な彼は此雲を親しく觀察せんとて出て行いたのであるが、尚ほ近づいて彼の雲の何たるかを驗せんとて、小舟を命じ其甥少プリニウスに同行せしめんとしたが、

少プリニウスは時に十八歳の少年で、折しも古書を繙き居りしゆへ同行を辭した。老プリニウスが家を出ると其一人の友人が来て自分の家は今しも危険に迫つて居るから、是非来て助けて貰ひ度旨由し出でた。そこで彼は數多の船を艦装さして、向ふの岸へと漕ぎ行く中にも既に熱灰や石は、舟の中へ雨の如くに降つて來たのである。而してスタベアの市へ着ると、其友人の内では逃仕度を調べて彼是と混雜の最中であつた。當時山が噴火するなどは夢にも思ひ當る人がなかつたので、皆山上の民家が燃へ出して大火となつたことと信じて居たのであつたが、人々の逃げ惑へる内にも老プリニウスは神色自若として、此の新奇な現象の研究に餘念もなかつた。夜に入つて灰や石の雨は尚ほ降り止まず、其上地震も劇しく家々も壊れん計りなれば、人々は松明を燃し頭に布圍を戴き戸外に避難して居つた。夜が明けた頃になつても夜は一面の暗黒界で何物も見分ることができず、追々に空氣も窒息させる様な氣味になり、硫黃の臭甚だしく山上より火炎を噴出すばかりでなく、地震も段々に劇しくなつて來たから、皆人々の逃げ行くに係らず、老プリニウスは尚ほ人の諫に従はず研究を續けんとしたが、呼吸も迫り遂に二人の奴隷に助け起されて逃れんとする中に、早くも絶息して其場に倒れたのである。斯くて噴火の勢稍収まり日も再び照り出でたのは、此より三日の後であつたが、人々が彼の熱心なる學者の遺骸を捜し出して厚く葬つたとのことである。

○ 少プリニウスの記事

其伯父を失つた少プリニウスは、伯父に同行せず家に古書を閱讀して居つたのであるが、此噴火の際自分の經驗したことを、後に彼の有名なローマの歴史家タシツスに書送つた。其書中に大略

當時地震は可なり劇しかつたが、一度ならず二度ならず餘り屢々のことであるから、一向氣にも掛けず母と共に家に止まり居つた所が、伯父(老プリニウス)の友人が訪づれ来て、無頓着にも程があるべしと叱られたのである。戸外に出づれば日光薄く微に家々の震動する状が見へる。野へは數多の群衆追々と集まつて來る。馬車は避難者を乗せて遠く駈け行けば、此所には子女を連れて走る父あり、彼方には夫を呼ぶ妻子あり、海岸の砂上に立つもの、山上の炎火を見上げて自失せるもの、實に世は暗黒叫喚の修羅場となつた。眞黒の雲は段々と降つて來る。沖の方イスヒア及びカプリの島々も其中に見へなくなつた。死ぬのが恐ろしいので却て早く死にたいと云ふものがある。手を上げて神に祈るものがある。モー神が何處にも居らなくなつた、世は之より永久の闇になつたとさへ叫ぶものがある。

此が大略少プリニウスの手紙の文面である。當時の人が何と此の異變を恐れたかが之によりても明白である。

○ ポムペイイ及びヘルキュラニウムの二市埋没

當時ヴェスヴィアスの破裂の爲め、附近の都會は破壊されたので、此兩市も大層繁昌な都會であつたが、初めに地震の爲め破壊され後遂に灰と鎔石との中に埋められたのである。而して其埋没された時より千六百年後まで、此等都會の所在地も分らなかつたのであつたが、千七百十三年今より百九十三年前に、勞働者が井戸を掘らんとて、地中二十四尺ばかり掘つた、所が其下がヘルキュラニウムの埋没されて居る所であることが分り、此より四十年後地下十二尺の所に、ポムペイイの市街が發掘された。之によつても當時降

り来た灰と、流れ下つた銻石の量の如何に多かつたかが分るのである。其の後ヨーロッパの古學者が種々骨折つて、此兩市の完全なる發掘を仕遂げたので、此等二つのローマの繁盛の市街地の中より、半身像や肖像や繪畫や日用品や其他が掘出し、ローマ文明の遺物か完全に今日に保存されて居つたので、當時の文明の模様が十分に研究された。而して此等の貴重なる古物は今其近所の小邑ボルチンの博物館に保存されてあるのである。此等の器物の外に此等埋没地中より父子夫妻が相抱きながら、熱灰中に生埋めになつた死骸も發掘されて、實に彼の天變の悲惨なる光景が眼のあたり目撃されたのである。

○ 本年のヴェスヴィアス山噴火の光景

以上述べたのは昔の噴火の模様の大略であるが、本年の大噴火も近來の新聞に掲載される報道により、殆んど彼の時の災禍と同様の大天災と考へられる。固より目下噴火の最中で取調べも十分には行届くまいし、且つ短かい電報で僅に其災禍の一端を知るにすぎないのであるから、實際の被害の模様は十分にはまだ知れないのである。併しながら今日までに海外電報によりて報ぜられた大略を紹介する。

四月五日ロンドンのロイテル通信社の電報が、始めてヴェスヴィアス山破裂の報を傳へてより全九日に至るまで被害の電報頻り、十日午後發ロンドン及びベルリン電報が初めて、噴火稍や鎮まつたことを報じたのである。而して十一日にロンドン電報は噴火漸く終つたと傳へたが、同日付けのベルリン電報は噴火再び猛烈となり、附近の地に硫黄を雨下し死亡者夥しく、寺院及び人家の崩落する者多しと報じた。其後如何であるか兎に角噴火の時日が彼の七十九年のに比して一層久しきに亘つて居るのから考へて、被害も必定多いことであらうと思はれる。八日發ロイテル電報によるに

伊太利ヴェスヴィアス噴火は、其の猛裂なる事驚く可き者あり。ポムペイイ側面に於ける山腹は崩壊し、新なる噴火口は是と反對の側面に潰裂し、重なる噴火口よりは噴火の熄む時なく、三千呎の高さに熱熾せる岩石を吐出し居り、ナポリは逃走者を以て充滿し、市街の人家は震動し夜に至れば多くの人々は公園に群集し居れり云々

とある。而してポムペイイ及び其附近にあるボルコトラカセ村や、トレアンヌンチマタ、トレデルグレコ及びテルチグノー方面も銻石に侵され、山上の氣象臺及び山上への觀光鐵道は固よりのこと、ソムマ、モツトジヤナ、ギグジオマリノ其他の諸村は埋没し、銻石の深さ七尺にも及んだ。尚ほ地震も劇しくサンジンセツペやサンヂオヴァニにては家屋崩壊して數名の死者を出したとのことである。ポルコトラカセを埋没し、其餘勢一時間に半哩の速力を以てトレアンヌンチマタを襲はんとして居る銻石流の如きは、其深さ二十呎幅六百呎もあるとのことである。降灰の如きも處によりては十二呎に及び、現にナポリ市に於ても同市の市場の建築物は、降積りたる灰の重量に堪へず遂に崩潰し、商人二百名生ながら埋められ、其結果十二名の即死著と二十六名の負傷者を出したとのこと、ナポリ市の全損害は今の所一億六千万圓に上ると云ふことである。斯くて幾百の人命は奪はれ幾百町歩の収獲物は荒され、ナポリの如き美麗なる都會を初めとし十三ヶ所の村落は銻石を浴びたのである。ヴェスヴィアス山の周圍十哩の地方は慘憺陰鬱なる荒廢の光景を呈し、綠色を帯びたるものは一も認むることができず、一帯の地方は濃厚なる霧に包まれ、ヴェスヴィアス山頂も見ることが出来ぬ。且つ屢々颶風起りて石塊灰燼を降すのである。

○ イタリア國王及王后陛下の勇武

此の意外の異變に際し政府はアオスタ公をして軍隊の指揮を執り、秩序の維持に勉めしめたのみでない。總ての軍艦をナポリ灣に發向せしめ、汽船には常に蒸氣を蓄へしめて危急に應ずべきことを命じ、現に軍艦二隻は一部住民を他に移しつゝあるのである。而して他のヨーロッパ列國は隣國友邦の此の災害を觀過することが出來ず各々助力を政府に申込み援助隊を現場に送らんとして居る。是に美談として歴史に傳ふべきは、同國王后兩陛下の勇敢にして、臣民撫育の情に富ませらるゝことである。四月八日の米國サンフランシスコ發電報は次の通り報道して居る。

イタリア國王后兩陛下は目下激烈に噴火中なるヴェスヴィアス山附近の村落に、昨日赴かるゝ際辛くも一命を拾はれたり。即ち兩陛下には被害村落に赴き窮乏に陥れる村中の御救恤中なりしが、偶々沸騰せる鎔石落下し御料自動車を取囲み、附近にありし多數の男女は兩陛下の目前に於て、悲惨にも鎔石の流れの中に投げられたり。又陛下は危難の身に瀕するや勇ましくも突進し、多大の困難を排して安全の位置に着せられたり。と。

尚ほ四月十日付ロンドンのロイテル電報は報じて云ふのに

其後の電報によればイタリア王后兩陛下は、灰燼土砂を飛ばせる危険の道をすぎ、ヴェスヴィアス山に到れり。途中暗燻たる空氣は呼吸を遮ぎり、脚を没するの泥濘は自動車進行を止め、隨行員等は進行を拒みたるも、兩陛下は恐るゝ事なく鎔石の方に進行し、トリアンヌンチマタ及びモットジヤノ其他の村落を巡視せられ、食物の分配を命ぜられたり。

國王の尊貴を以て斯かる危険を犯して、窮民を撫育せらるゝのである。イタリアの國民は不幸の中にも大に幸福なる國民と云はなければならぬ。

○ 噴火の終熄

四月十三日のロイテル電報は先づ

噴火の形勢は概して改善したり。噴火は終熄せんとするものと信ぜらる。引續き灰は降るも以前に比すれば頗る少し。

と報じ來た。而して同日付同電報は引續き報告して曰ふには、

ナポリ市よりの報道に曰く、灰の降下は全然終熄し、空は澄明に大陽は輝きヴェスヴィアス山も見ゆるに至り、公衆は漸く安堵の思を爲し、平常通り業務を始めんとす。

尚ほ別報によるに鎔石は今凝結し始めつゝあるとのことで、先此の大災禍も此で終つた事であらう。今日までの處此の噴火は五億フランの損害を來し、人命八百を殺したとのことであるが、今後噴火及び被害の模様も追々と詳細に調査報告されることであらうから、後日を期して本誌上に述べることにする。